



2025 年度 教育スポーツアカデミー 活動報告書



EDUCATION SPORTS ACADEMY 2025

巻 頭 言

世界では中東を中心に戦争が勃発し、湾岸諸国にも甚大な被害が発生しています。その影響により、わが国においても石油の輸入が滞り、農業や工業に支障をきたしている状況です。

わが国をはじめ世界各国が、出口の見えない混迷に直面しているように思われます。また、温暖化の進行により、地球規模で自然災害が発生し、大きな被害をもたらしています。

そのような状況の中で、わが国にもさまざまな課題があります。教育界に目を向けると、公立中学校の部活動改革、不登校児童生徒の増加、教職員の働き方改革など、共通する課題認識を探る必要があると考えます。ここでは、不登校児童生徒の増加について述べます。

文部科学省の最新の公表によると、小・中学校における不登校児童生徒数は約35万4千人で過去最多となっており、さらに学校内外の機関等で専門的な相談・指導を受けていない児童生徒も約13万6千人存在します。つまり、不登校は一部の特殊な事象ではなく、学校・家庭・地域が継続的に向き合うべき課題であるといえます。(文部科学省)

教育スポーツアカデミーにおいても、多様な課題を見つけ、関係機関・関係団体と連携を図りながら、対応を模索していきたいと考えています。

○ 通学している児童生徒と不登校生の心理的断絶

通学している子どもにとって、不登校は「別世界の話」になりやすい傾向があります。その結果、教室内において不登校の同級生が「いない存在」として扱われやすくなります。これを放置すると、共感や想像力ではなく、無関心が固定化されてしまいます。

○ 不登校生の自己表現機会の不足

不登校の子どもは、学校行事・部活動・日常会話など、自然発生的な自己表現の場から離れやすい状況にあります。表現の機会が減少すると、「自分の考えを発信する」「誰かに受け取ってもらう」といった経験が乏しくなり、自己の存在感が希薄になってしまいます。

○ 社会との接点不足による自己実現力の低下

不登校生のための支援の場があっても、参加へのハードルが高い、継続が難しい、人前に出ることへの不安があるといった理由から、社会との接点を持ちにくいケースが多く見られます。したがって、「参加しやすさ」と「続けやすさ」を前提とした活動の充実が必要です。

以上、不登校生について述べてきましたが、今後は不登校生と共に学ぶ場の設定や、子どもたちの可能性を引き出し、活躍できる場づくりを模索していきたいと考えております。

これからの時代は、多様な人々との融合や結びつきが求められます。教育スポーツアカデミーでは、「『わかった、できた』は過去、『疑問』が未来を創る」をテーマに、今後も活動を推進してまいります。

2026年4月

教育スポーツアカデミー

代表 加賀谷 孝

目 次

巻頭言	1～ 2
第1回研修会	4～16
2025. 5. 25 八千代市教育委員会庁舎にて	
第2回研修会「教育講演会」	17～30
2025. 6. 21 八千代市教育委員会庁舎にて	
第3回研修会「外国籍生徒による私の主張」	31～60
2025. 10. 19 八千代市教育委員会庁舎にて	
朗読劇と音楽の集い	61～72
2025. 11. 24 千葉英和高等学校チャペルにて	
第4回研修会「スポーツ講演会」	73～85
2025. 12. 6 八千代市福祉センターにて	
第5回研修会「スポーツ指導者懇談会」	86～87
2026. 2. 18 八千代市教育委員会庁舎にて	
法人会員のページ	88～90

第1回 研修会

1 日時 2025年5月25日(日)13:30~15:30

2 会場 八千代市教育委員会庁舎

3 テーマ 「海外視察(フィンランド)報告」

4 講師 本会会員 高木 雅晴 先生
本会会員 大澤 紀子 先生



フィンランド教育視察報告

八千代台東小学校 高木 雅晴
八千代市教育センター 大澤 紀子

1 派遣目的

フィンランドの学力観の根底にあるのは、ヴィゴツキーが提唱した社会構成主義 (social constructivism) であると言われている。

同国における学習とは、実践的・社会的な目的のために知識や情報を収集し、それを自分なりに再構築・編成して社会に発信することであり、主体的な営みでありながらも他人との相互的なかわりに立脚している。

世界でも、トップレベルと言われているフィンランドの教育の現状についてフィンランドの国内の保育園・小中学校・特別支援学校を訪問し、その実態を調査すべく視察に行かせていただいた。

2 派遣期間 2025年1月28日(火)～2月3日(月) ～6泊7日～

月	日	曜	行 程
1	28	火	08:25 ※HND 東京(HND-羽田空港)発 JL047 便 13時間05分 14:40 ※HEL ヘルシンキ(HEL-ヴェンター空港)着 スカンディック・シモンケンタ(泊)
1	29	水	午前:フィンランド学校訪問①②(サウナラハティ小中一貫校&YC) 午後:フィンランド学校訪問③(エスポー市立パープーリ保育園) スカンディック・シモンケンタ(泊)
1	30	木	午前:フィンランド学校訪問④(ヴィヒティ市立クオッパヌミ保育園) 午後:フィンランド学校訪問⑤(クオッパヌミ小中一貫校) スカンディック・シモンケンタ(泊)
1	31	金	午前:フィンランド学校訪問⑥(私立マリヤッタ特別支援学校)～シュナイタースクール～ スカンディック・シモンケンタ(泊)
2	1	土	17:45 ※HEL ヘルシンキ(HEL-ヴェンター空港)発 JL6800 便【欠航のため帰国延期】 クラリオンホテル ヘルシンキ エアポート(泊)
2	2	日	17:30 ※HEL ヘルシンキ(HEL-ヴェンター空港)発 JL048 便 13時間55分 機内(泊)
2	3	月	14:25 ※(HND-羽田国際空港)着

3 はじめに

中央教育審議会の答申では、2020年代を通じて実現を目指す学校教育を「令和の日本型学校教育」とし、その姿を全ての子供たちの可能性を引き出す「個別最適な学び」と「協働的な学び」の一体化とした。これは「個に応じた指導」を学習者の視点から整理した「個別最適な学び」と、これまでも「日本型学校教育」において重視されてきた「協働的な学び」とを一体的に充実させることを目指している。

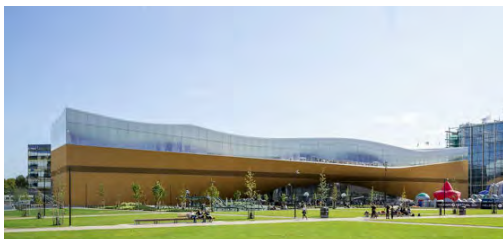
「令和の日本型学校教育」は、従来からの「日本型学校教育」を次代の要請に即した必要な改革を進めるということで、ブラッシュアップするという考えから生まれたものである。これまでの「日本型学校教育」では「学校が学習指導のみならず、生徒指導の面でも主要な役割を担い、様々な場面を通じて子供たちの状況を総合的に把握して教師が指導を行うことで、子供の知・徳・体を一体で育む」ことをしてきた。この教育は現在も日本の学校教育の基盤となっており、特に昨今フィンランドをはじめとした多くの国々から注目されている。

一方では、「みんなと同じことができる」「言われたことを言われたとおりにできる」上質で均等な人材の育成が高度経済成長期の社会の要請として学校教育に求められてきたなかで「正解の暗記」の比重が大きくなり「自ら課題を見つけ、それを解決する力」を育成するために、他者との協働や自ら考え抜く学びが十分になされていないのではないかという指摘がある。

そこで、これからは子供が課題を自分事として捉え、自由度のある学習の場を教師が保証し友達と情報を共有しながら、さらに理解を深めることによって「主体的・対話的で深い学び」へと発展する授業が求められている。したがって「日本型学校教育」をブラッシュアップするため自由度を多く取り入れた学習環境を整備しつつ、主体的な学びに繋げていくことが必要であると考え、そのヒントをフィンランド教育から学ぶべく今回の教育視察に至った。

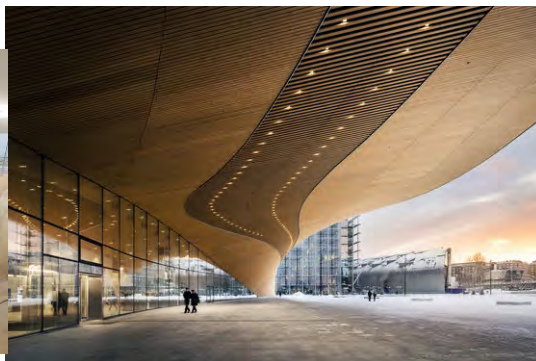
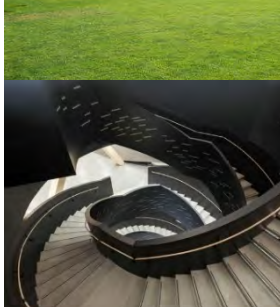
今回はその主体的な学びを追究するためにフィンランドの自主学習に注目したわけである。

フィンランドでの学習は、教科領域を問わずテーマを各自が決めて自身で調査し、レポートをまとめて発表する過程を経る授業が多く、児童生徒一人一人が主体となっていく必要がある「誰もが平等な教育の機会の保障」に専念したシステムに基づいた授業である。したがって、「落ちこぼれ」と呼ばれる子供は見受けにくく、教師のサポートを得ながら良質な教育を受けられるという体制もフィンランド教育の特徴の一つであると感じた。



ヘルシンキ中央図書館

国際図書館連盟 (IFLA) 2019 年度の Public Library of the Year (公共図書館オブ・ザ・イヤー) で世界一に選出される



4 訪問国の概要

今回訪問したフィンランドの首都ヘルシンキは北緯 60 度にあり、札幌が北緯 43 度であることからかなり寒いとの印象があるが、昨今の暖冬の影響で想像よりも温かく最終日こそ小雪が舞ったが、到着した日は最低気温 2℃ 最高気温 5℃と日本の方が寒いくらいであった。が、翌日は最高気温-3℃最低気温-8度とフィンランドの冬の洗礼を受けた。

北欧といっても、隣国（ドイツ、ロシア）との関係をそれぞれの国の独自性を持っており、近隣北欧 4 か国は、言語も通貨も各国異なる。また、EU に加盟している国はフィンランドとスウェーデンの 2 か国である。

フィンランドは、1917 年にロシアから独立して約 110 年が経過する。隣国ロシアとの歴史的、政治的、民族的距離感から NATO には最近まで加盟していなかったが、一昨年前に加盟した。スウェーデンも中立を謳ってしばらくは NATO に加盟していなかったが、ロシアのウクライナ侵攻に伴い昨年加盟した。これで北欧 5 か国の全てが NATO に加盟したことになる。

スウェーデンとデンマークもこの 2 国間で過去 200 年にも及ぶ戦争をしていた経緯がある。デンマークは第二次世界大戦でドイツに占領されたという歴史を持っており、ドイツに対する感情的なものもあるとのこと。北欧 5 か国は互いに影響し合い、一方ではそれぞれが独自性を保っている。

フィンランドは税金こそ高い（以下参照）が、そこで生活を営む人々の精神的ゆとりや文化的な豊かさを実感できた。福祉、教育、環境という点でも先進的な国であると感じた。

フィンランド共和国



○面積：約 34 万km²（日本面積の約 90%）

全土の 1 割は氷河湖（氷河の浸食や堆積等で作られた窪地に水がたまってできた湖。氷食湖ともいう。）で、3 分の 1 は泥炭の沼沢地。林業と牧畜業が盛んである。

バルト海東岸に位置する国の一つであり国境は、北はノルウェー、西はスウェーデン、東はロシアと接する。南はフィンランドを挟みエストニアと対している。

- 人口：約 558 万人
- 首都：ヘルシンキ（約 67 万人／船橋市の人口相当）
- 公用語：フィンランド語（89%）スウェーデン語（5%）
- 宗教：プロテスタント・ルーテル派（73%）
- 通貨：ユーロ€（2002 年から導入）
- 在留邦人：約 2,000 人
- 政治体制：共和制，一院制，議院内閣制に近い半大統領制
- G D B：フィンランド 53,131 \$ (19th), 日本 33,849 \$ (22th)
- EU加盟：1995 年 1 月欧州連合（EU）に加盟
- NATO加盟：2023 年 4 月 NATO（北大西洋条約機構）に加盟
- 税金制度：社会保険料 28%，所得税 14%，消費税 25.5%，住民税 20%



<フィンランドの教育の概要>

OECDが進めている世界の15歳児童を対象として学力を測定したPISA調査において、フィンランドは2004年には学力総合で世界1位となるなど、常に安定的に世界の上位にランクインしている。かつては日本の教育も世界トップクラスであったが、最近ではPISAテストの成績が低下している状況だが、PISA調査でトップクラスの成績を収めてきたフィンランドの教育は、現在でも学力低下や学びの質の向上を図る方策に悩む国々の注目を集めている。

フィンランドの学校教育体系は、幼少期の教育からはじまる。幼少期の保育や教育が、子供たちのバランスのとれた成長と発達、そして学びにつながるとの考えから、6歳児を対象とする就学前教育を義務化しており、全員が受けることになっている。この制度は就学前教育「プリスクール」と呼ばれ、2001年に制度化されており、学習の基礎となるスキルや知識、能力を遊びながら学ぶスタイルを中心として、就学前の子供に1年間のカリキュラムを提供している。

次に、小学校・中学校は9年制の一貫教育である。これは日本でいう義務教育期間であるが、フィンランドでは7歳から15歳を対象とした1年生から9年生に分けられ、1年生から6年生までが初等教育、7年生から9年生を前期中等教育と呼んでいる。基礎教育を履修した生徒たちは、高等学校あるいは職業学校という後期中等教育へ進み、これらの高校か職業学校へ進学する生徒の割合は、合計で90%を超えており、高校に進学した生徒たちは、将来の大学進学を目指し、また、職業学校に進学した生徒たちは、職業資格の取得をそれぞれ目指している。

また、これらのフィンランドの学校教育は、就学前段階から高等教育段階に至るすべてに共通する特徴として、制度的に弾力性が担保されている。政府が定めるカリキュラムの達成方法についても、その目的が達成されるのなら、教え方は学校の裁量に委ねられており、学校ごとに特色のある独自のカリキュラムを作成している。教科書についても指導者が選定できる。

<フィンランド教育の特徴>

① 教育の平等

フィンランド教育の原則は、すべての人が平等に質の高い教育や訓練が受けられるよう教育を無償化することが憲法でも定められており、就学前の教育に始まり高等教育にいたるまで、すべての課程において教育は無償で受けられる。民族的な背景や年齢、貧富の差などは関係なく、すべての人に平等に同じ教育の機会が与えられている。それは、就学前教育と基礎教育においては教育が無償というだけでなく、教科書や給食、遠隔地に暮らす児童の送迎に至るまで無料で行われている。国の政策として、資源も少ないフィンランドでは、子供を人材と考え、子供たちがその能力や個性を伸ばしていく機会が子供たちのおかれている環境によって制限されることがないように、平等に制度設計されたものである。そのため、PISAによる調査でも、フィンランドは、生徒の経済・社会・文化的背景が学習到達度に与える影響が、他の国に比べて低いことも明らかとなっている。

また、これらの教育財源についても、国と地方がその責任を分担して担い、政府から地方自治体へ配分される予算額は、その自治体に住む6歳から15歳の子供の数や自治体ごとの状況に応じて予算配分されることになっており、概ね国が3割、自治体が7割といった割合で教育費を捻出している。そして、それらの公的資金は、私立の学校にも配分されるため、公私ともに国の教育カリキュラムを遂行している。

② 学力格差の是正について

PISA の学習到達度調査において世界最高水準の学力を誇るフィンランドだが、その教育における学校の授業時間数は、OECD 加盟国の中でも最も少ない。日本の学校の年間授業日数と比較しても約 40 日少ない。また、「全国一斉学力テスト」のような国レベルのテストはもちろん、地域レベルでも学力テストを実施していない。フィンランド教育で力を入れていることは、学習の格差の改善であり、児童生徒全員の能力を平均的に高めるよう工夫がされている。つまり、できる子供をより伸ばしていくよりも、学習が苦手な子供に手厚い指導を重視しており、学級は 24 人以下の少人数で、20 人前後のクラスが多く、そして補習制度も導入しており、学級内でも学力に応じて個別指導ができるように工夫をしている。そして、競争させることよりも個々の学びの大切さを理解させ、学力格差が生じないよう努力している。

③ 教師の質の高さ

フィンランドは教師の質が高いと言われている。フィンランドでは教職を「もっとも優秀な人がつく職業」と認識され、国民からもその社会的地位や信頼度を高めており、子供たちも教師への憧れが強く、教師は子供たちが将来「なりたい職業」の上位に位置している。実際に、フィンランドではすべての教師を大学院で養成し、修士号を取得した人のみが教師になることができるシステムをとっており、教師の学力は非常に高く、修士号取得まで要請している国は、ヨーロッパの中でもフィンランドだけである。

また、フィンランドには課外授業や部活などもないので、教師の勤務時間は少なく、教師は勉強を教えることに集中することができる。そのため、授業の準備などにも多くの時間を割くことができる。フィンランドでは教師こそが教育の要だという認識に立ち、教師の養成や研修に力を入れ育成をはかっている。

④ フィンランドの教育制度の構造(高校までが義務教育)

フィンランドの学校教育は、全ての人が平等に質の高い教育や訓練を受けられ、民族的背景や年齢、貧富の差や居住地に関係なく、同じ教育の機会が可能でなければならないことを基本原則としている。初等教育前教育から高等教育にいたる、すべての教育課程において教育費は無償となっており、初等教育前教育と初等教育においては、教科書や給食、遠隔地に暮らす児童の送迎も、保護者の負担なく無料で提供される。フィンランドの教育制度は、「行き止まりのない教育制度」として学び続ける生涯学習に焦点を当てていることに特徴があり、学ぶ機会はいつでも、どこでも、生涯を通して続けられるようになっている。大部分の教育機関は、公的資金によるもので、初等・中等教育を提供しているほとんどの教育機関は自治体、またはいくつかの自治体を管轄する地域 (alue) の行政機関によって管理されている。教育財源に関しては、国と地域がその責任を担う。私立学校についても、公立学校との違いはなく、公的資金が投じられている。また公私立学校ともに国の教育カリキュラムに沿い、その内容を遂行している。



○保育・幼児教育(0 - 6 歳)

○就学前教育(6 - 7 歳) ~プリスクール~

・2015 年から義務化

- ・ 6 歳にある年に開始
- ・ 月曜日から金曜日まで 1 日 4 時間
- ・ 小学校入学のための教育（日本のスタートカリキュラム的な位置づけ）
- 基礎教育（7-16 歳、小学校、中学校）
- 一般中等教育（高校）
- 職業教育
- 高等教育
- 成人教育（生涯教育の価値観）
 - ・ 社会人になって学び直したいと思えば、無償で何度でも大学に入り直すことができる。
 - ・ 日本では往々にして「飛び級」が評価されるが、フィンランドでは時間をかけて「学び直し」をした豊富な知識がある人が一目置かれている。

※とは言え、お国柄「頭が良い」とか「優秀」というような評価対象ではない。

5 視察校の紹介

① サウナラハティ小中一貫校 & YC

新しく開発された地域の中に建てられた新しい学校（2012 年創立）で IT 企業や研究開発業を職業とする保護者が多い。

基本的には学区制をとっているが、キャパシティに余裕があれば他学区の児童生徒も受け入れる。学校施設は、多目的教育センター機能を持っておりライブラリーや調理室、工作室などを一般市民にも開放している。

教室だけではなく廊下でも学ぶことができるように境にはガラスを用いている。また、昨年の 1 月に法整備され、原則としてソーシャルメディアは使わないことになった。

理由は、コミュニケーションの不足と情緒障害をもつ子供たちの増加によるもの。

Learning by doing（子供が家庭や地域社会などの身近な生活の中で、様々な知識は身体を通して獲得していくように、学校においても、子供が心だけでなく体をも通して学ぶこと）

が支流で「体験しながら学ぶこと」が point。

Active Learning（教員による一方向的な講義形式の教育とは異なり、学修者の能動的な学修への参加を取り入れた教授・学習法の総称。学修者が能動的に学修することによって、認知的、倫理的、社会的 能力、教養、知識、経験を含めた汎用的能力の育成を図る。発見学習、問題解決学習、体験学習、調査学習等が含まれるが、教室内でのグループ・ディスカッション、ディベート、グループ・ワーク等も有効なアクティブ・ラーニングの方法）が学習方法の基本。

(管理面)

- 人事権は校長にあり、校長が面接をして職員の採用を決定する。校長も教諭も任期は特にない。
- 学校予算（480～500 万€）約 8 億円（教員給与平均 800 万円程度）日本と比較して 25%増程度。
- 児童数が 600 人を超えると副校長を配置しなければならない。
- 毎週 1 回、組織運営チームと学年主任が集まって会議を開催。（学年会 2 週間に 1 回）
- 特別支援学級の教員も含めて月に 1 回 10 種類の専門委員会を開催

(教育面)



- 教師の自由度を尊重している。(INNOVATIVEな教師が多い)・・・自由進度学習が中心
- ナショナルカリキュラムは変更できないが、指導の仕方は任されている。(教科書採択も)
- 新学期は8月中旬～楽器の修了は5月末日(6月～8月中旬まで夏休み)

～教科選択制～

- ・選択教科10種類を設定。
- ・学校の職員と特性と子どものニーズに合わせて校長と副校長が決定する。

～教育課程～(8月中旬～5月まで) ※時数は日本とあまり変わらないが登校日数が少ない。

- ・1・2年生・・・21時間(25～26時間)
- ・3・4年生・・・23時間(28～29時間)
- ・5・6年生・・・25時間(29時間) ※高学年は専科担当制
- ・7・8・9年生・・・30時間(29時間)

☆教師の指導法を整えることが校長の役割

➡若い先生方には教育活動の場を教室に留まらせないように指導している。

- OUR VISION・・・先生方のビジョンを意見交流させる(他を受け入れない教師は✕)
- OUR MISSION・・・子供が自ら学ぶ姿勢(大人の都合に合わせてよい子でいる子供✕)
- OUR DREAM・・・①強み ②共感 ③希望 ④居場所 ⑤ ? ⑥飛躍

(授業の実践)

- ・小学校2年生の単語の習熟(自由進度学習)

(課題)

- ・保護者との協力(親は子供になくてはならない存在)
- ・躰を身に付けさせること
- ・教育費の予算減少への対策
- ・若い教師の心身の健康管理



② エスポー市立パープリー保育園

日本でいうプリスクールは修学前児への英語教育を示す場合が多いが、フィンランドでは就学前教育を指し小学校入学前の準備教育(スタートカリキュラムの保育園版)が特徴。

日本の幼稚園や保育園と同じように、園舎があり資格を持った保育者がいる施設である。日本の幼稚園は「教育」、保育園は親の就労などにより保育に欠ける部分を「ケア」することを主な目的としている。一方フィンランドでは「教育」と「ケア」を一体的に提供する。日本の幼稚園と保育園の両方の役割を兼ね、最後の一年のプリスクールは小学校1学年の学習が行われる施設であると言える。多くの保育園が自治体によって運営される公立園。3歳未満の子どもは4人につき1人、3歳以上は子ども7人につき保育者が1人以上配置。フィンランドではプリスクールも無償で、送迎の際は保護者が送迎することが多いが、送迎できない場合はバスやタクシーを無償で利用することができる。

(運営面)

0～6歳120人7グループで編成、そのうち6歳児(プリスクール)は28人。

自分の強みを見つけることと、遊びを中心に(一日2～3時間教育的遊びをカリキュラムに取り入れている。)

(指導面)

- 総合的な学習を中心に、思考力を育て探究心を身に付ける指導を心掛けている。

- 「心」「健康」「社会性」を育てるためのサポートを意識して人間性を育んでいる。
- プリスクールの教材活用・・・知識も大切だが感情内容を育てるための内容が多い。
- 月曜日・・・算数科や国語科は森に行って体験を通して学習を行う。
- 木曜日・・・体育科
- 金曜日・・・芸術（モノづくり）

(言語化の重視)

～感情的になった時～

- ・互いに落ち込んだことについて言葉で伝え合う。
- ・何が原因なのかを言語化する。(客観的に理由を明らかにすることが大切)
- ・感情がどれくらい高まっているかを「イラストレーター」を使って表現する。



(特別支援教育)

- 取り出すのではなく「寄り添う」ことを基本的なスタンスにしている。

③ ヴィヒティ市立クオッパヌミ保育園

(運営面)

「3歳未満」2グループ、「3歳以上」5グループの7つのグループで構成している。どのクラスにも特別支援教育を必要とする園児が在籍している。

園で大切にしていることは、“子どもたちが自分で考えられるようにすること”。保育士の子どもへのかかわり方を見ていると、子どもたちの活動に対して、リードすることなく、一歩ひいて目を配っている様子だった。子ども同士で何かトラブルが起きたときに、自分たちでどうしたらよいかを考えられるように促すようにしているとのことであつたので、基本的には前に紹介した保育園と同様の方針で、これは後に示すナショナルカリキュラムと通じるものを感じる。このような活動を通して、子どもたちは主体的に活動にかかわり、自分の意見を言えるようになり、協調性や自主性を育んでいくのだろうと感じた。

(幼児教育の新ナショナルカリキュラム6領域)

- ①考える力と学びにつながる学び。
- ②多様な文化を理解する力、人とのかかわりあい表現していくこと。
- ③日々を生きること、自分も他者も大切にすること。
- ④マルチリテラシー
- ⑤ICTスキル
- ⑥社会への参加、持続可能な未来を作りつづけていくこと。

「乳幼児期は、生涯にわたる学びのスタートであり人格形成の基礎となる」という認識を、教育の共通のねらいとして小学校以上の各教育課程のナショナルカリキュラムにも盛り込んでいる。

(教育面)

～自分の強みを発見するための「カラスカード」(see the good)の活用～

- ・フィンランドも以前は自分や相手の劣っていることに目が行きがちであつた。
- ・ポジティブになるために自分の強みを見つけることが有効であることに着目した。

・「カラスカード」は他者や自分、親子、面談時、指導者どうして活用し、現在では普段の生活の中の一部になっている。(中学校でも継続的に活用している)

➡自分の感情をコントロールするときにも有効。

➡カードに書かれているイラストが重要(裏面には指導のアドバイスも書かれている)

・プリスクールでは特に重要であり、小学校につながる。

・「やって良いこと」「いけない事」を誘導するより子どもの心情を中心に教育していく。



④ ヴィヒティ市立クオッパヌミ小中一貫校

ナショナルカリキュラムに沿って教育課程を進めている。以前は、自治体(教育委員会)からのチェックがあったが、今は学校への信頼のもと実施している。

以前に比べると、学校も社会も変わってきている。子どもも変わり、保護者も問題を抱えている。また、教師も疲れている様子がうかがえる。原因は家庭でケアすべきことなどを学校に求められている。自分の強みを見つけるプロジェクトを保育園～高校まで実施している。

(子供の変化)

・集中力がなくなり、情緒不安定(うつ病)になる子どもの数が増えている。原因はAIの使用によるものであると国の研究調査発表を受けて、今年の1月からICT機器の学校での使用を制限する法整備が行なわれた。(学校内では教師の指示があった時だけ使用が認められる等。)

・失敗経験が少なく心が折れる若者が増えている。

・朝食を摂らずに登校してくる子どもが増えてきている。

・将来の職業種上位に「You Tuber」がランクインしてきたことが今までにはない現象である。

(授業の様子)

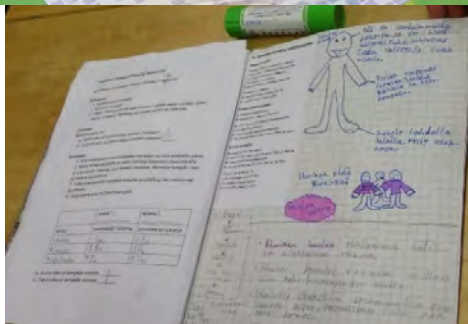
① 環境学習(教科横断型の合科学習)・・・「単元内課題選択学習(自由進度学習)」

多くの子どもたちは「人体の学習」をしており「心臓」「肺」

「肝臓」など、各種部位を調べていたが、すべてを調べることはなく、調べない部位は友達同士で聞くことで互いに共有する学習が主体。

・全員に同じことをさせるということは教員が一人一人を見ていないと保護者は評価する。

・小学校5年生の学習であったが、内容は高校の生物のレベルであった。ノートにわかりやすくイラスト入りでまとめられており、ICT機器を使う姿は見られなかった。また、だれがどの部位を調べているかなどを子どもたちが把握しており、各自の課題解決学習の充実に留まらず、情報の共有化もしっかり図られていることに感動した。

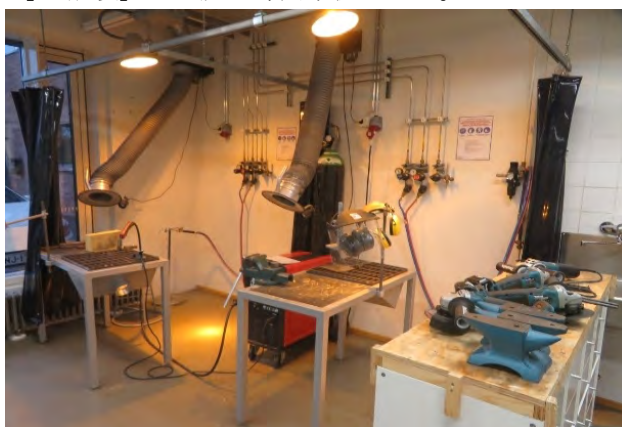


- ②算数科 (等しい分数)・・・「一斉授業 (アルゴリズムはAI ソフトが動画で説明)」
- ・単位分数に着目させる発問を動画が説明。(教師の声だとマンネリ化してしまうから・・・)
 - ・子どもたちに「考えさせること」と「教えること」は区別しているとのこと。

③家庭科 (家庭経済)・・・「テキスタイル」「木工」「溶接」➡施設は専門学校レベル。

④生徒会 (特色あるユニークな企画)

- 「2月14日友達の日」企画
 - ・パートナーあり (赤色の服着用)
 - ・気になる人あり (黄色の服着用)
 - ・フリー (青色の服着用)
 - ・この企画無関心 (黒色の服着用)



- 「休み時間にだらだらしない」企画
 - ・週1回25分会議
 - ・月1回60分会議 ※話し合う内容を事前に計画的に準備し充実した会議を目指す。

○「サポート・スチューデント」企画

- ・中1ギャップのフォロー
- ・スポーツの推進エージェント
- ・もめごと仲裁委員 (すぐに先生に言わず、第三者を含めた子どもたちで解決)
- ※委員がクラスにいると安心できるし、先生方も助かるのではないかな?

⑤ 私立マリヤッタ特別支援学校 ～シュナイタースクール～

特別支援学校として「マリヤツクスクール (従来型特別支援学校)」が設立される。その後、1982年に障害者にも学ぶ権利があると法律で制定された。

本学は前期後期に分けずに、各自の課題が達成できたところが前期の終了で、次の課題に移るそのタイミングが後期のはじまりと考えている。

クラスは年齢で分けており8人1クラス制。1～5年生を「Lower Crass」6～9年生は「Upper Crass」としている。義務教育は9年だが、本学は10年生とし「Lower Crass」か「Upper Crass」の期間で1年多く学ぶことを可能にしている。実態は「Lower Crass」で6年間生活するケースが多い。指導者は1クラス1人の担任とアシスタントが2～3人就いて、一人一人の時間を確保している。個別の指導計画を作成し、丁寧に一人一人の学びを保障している。私学と言っても公立同様に無償で、保護者の負担は一切かからない。

(学校設計のこだわり)

- ・8時登園 (保護者の送迎が多いが、タクシーでの登園も最近が多い)
- ・朝の会 (歌などを歌いながら個性を尊重し、集団生活にも慣れさせることが目的)
- ・1～2時間目は主要教科学習 (心と体を動かした合科学習)
- ・読む&語りの時間



(ノートも活用して書く学習も行うが、スモールステップの達成感を味わわせることが目的)
※学童保育 (フリースクール) の設置・・・5歳児から受け入れている。

(職員構成)

教員以外に言語聴覚士、理学療法士、特別支援教育担当者、応用医療医師が勤務している。

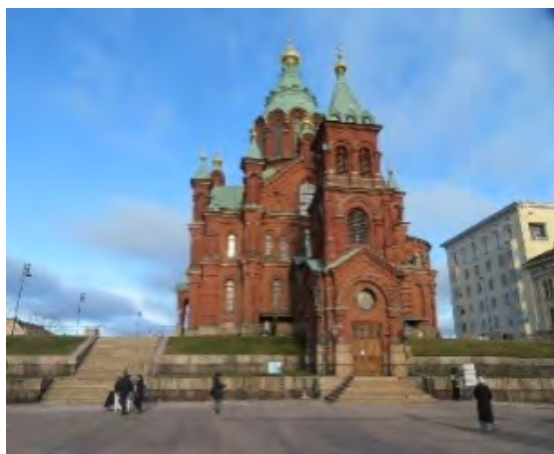
セラピスト（1回30分程度週2回実施）…マッサージ・感情・言語・ポニーetc

(例) 言語セラピー・・・体を動かしアーティスティックな活動をしながら言語力を習得する。

(学校の設計のこだわり)

1920～1930のファンクショナリズム（造形）を取り入れている。

- ・学習環境を整備するではだめで、心と体のウェルビーイングをモットーにしている。
- ・自然な素材、曲線や明るさ（光とり窓）を積極的に取り入れている。
- ・心が平安であることで落ち着いた取り組みができる。
- ・カラーセラピーの観点から柔らかな色を使い設計している。
- ・園庭には石と木を多く取り入れ、完成を重んじている。



6 おわりに

「何のために教育はあるのか」「自己肯定感を養うためには何をすればいいのか」「社会の中で、自立した人間として様々な課題を乗り越えていける人を育てるにはどうすればいいのか」こんなことを強く考えさせられた今回の視察であった。教育は、自分の強みを認識した自立した人間として、社会の中で周りの人々とともに、幸せに生きていくことができる人間を育成するためにある、という考え方がどの学校に訪問しても、共通して徹底されていることに感動した。そんな教育の目的を達成するために、先生たちはお互いに話し合い、学び合い、新しいことに挑戦しているという話も印象的であった。そして、子どもたちが進んでいく道は何度でもやり直すことが保障されていることにも、人づくりを第一に考えている国家の考え方を再認識させられた。

目の前に次々と課題があふれる現在、自ら考え、判断し、周りの人々と手を携えながら乗り越えられる逞しい子どもたちを育てていく責務をあらためて強く心に刻んだ視察であった。

